
End of autumn

かもかも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

End of autumn

【Nコード】

N0090K

【作者名】

かもかも

【あらすじ】

少女との間に起きた過去の大きな事件。
その事件後に関係を断ち切り、赤の他人として生きていくことを決心する主人公。
過去の少女との関係。主人公の決断。
一日一日が残り少ない時間を削っていく――。

シリ阿斯が多めになっています。苦手な方は読まないほうが良いかと思います。

秋の始まり。(前書き)

どうもかもかもです。

この作品は少々、いえ大分シリアス方面が濃いので、そういうのが嫌いな方は見ないほうがいいと思います。

別に大丈夫って方はどうぞご覧ください。

文章が稚拙なのはご愛嬌ということ。

秋の始まり。

高校2年生の春——物語の始まり。

それは一瞬の夢物語のようで、毎日が楽しくて、苦しくて、もう俺には時間なんか残っていないのに俺なんかと一緒にいてくれる人たちがいる。

嬉しくて涙が出る。涙なんて当の昔に枯れ果てたはずなのに——
|。

楽しくて笑みが止まらない。笑顔など遥か昔に置いてきたはずなのに——。

音を鳴らし動き出す歯車。

近づいていく終焉。

奇跡には縊ろうとはしない。近づいたっていい。もう満足だから
.....。

そよ風が冷たい。辺りはもうぼんやりと明るいが少々冷える。正直寒い。

残念ながらこんな状況にも慣れてしまった。次々と渡された新聞を決められた場所に入れていく。

5時から始めた新聞配達もうそろそろ30分が立つ。この調子で行けば後30分ほどで終わるだろう。

朝霧の中ゆっくりと自転車を走らす。高1の時からやっているこの作業はもう一年近くたつ。

一年前となんら変わらない街並み。

咲間市さくまじ。人口は5万人ほどのこの街は、都心からはだいぶ離れてはいるが中々栄えある街。良く言えば都会、悪くいえば普通といった感じの街。けれど大きなデパートだってあるし、立派な遊園地もある。一般的な学生にとっては非常に住みやすい街だ。

「……………」

住みにくくは、ないんだと思う。

この街並みも好きだし住んでいる知り合いに嫌いな人なんていない。

けど俺のことを嫌っている人はいるだろう。少なくとも俺はその人物を知っている。それでも良い。嫌っていても俺のことが頭に残っている。それだけで俺は満足だ。

これはすごく自分勝手な考えなんだろう。俺は最低な人間だ。そう呼ばれても良いことを仕出かした。

罪を償うこともできた。許されるまで食いつけばよかった。けれ

ど俺はそれをしなかった。

何故あの時俺は……。

——思考を中断する。

足が震えて動かなくなる。

胸が苦しくなり、息がしづらくなる。

その先は思い出させない。何も考えるな。頭を真っ白にしろ。

……何秒たったろう。

ゆっくりと顔を上げる。さっきまで、熱くなっていた俺の脳みそは冷えきっていて、冷静さを取り戻していく。そしてまたゆったりとした足取りで作業に没頭する。今は何も考えない。これでいいんだ。

日が目立ちだした頃、ようやく最後に一枚を入れ終わった。時間は6時過ぎ。考え事をしすぎたせいかな、いつもより時間がかかってしまった。まあ別に珍しくもなんともないことだけど。

独りになると考え事をするのはもう癖だ。

頭では嫌だと思ってもついつい考えてしまう。それがたまたまなく嫌だ。だから俺は独りが嫌い。そして毎日のこの『朝』という

時間帯が大嫌いだ――。

自転車を走らせ自宅に向かう。

辺りを見渡すと、左右に並ぶのは豪勢な住宅街。いつかこんな家に住みたいと思いつつも全財産を思い出しては首を横に振る。

「足りないなんてもんじゃないよな……」

自分の貧しさに苦笑し、また家に向かう。

住宅街をまっすぐ抜けたところに俺の家はある。

大家さんには失礼だが随分と寂れたアパート。でもそれは見た目だけで中は意外と快適。家賃も安いことながら駅から遠くはないので、俺からすれば最上級の好物件だ。

アパートの傍に自転車を止め、家に入る。

新聞配達で汗をかいたからすぐに軽くシャワーを浴びる。ああ、水道代がもつたいない。

節約のために早々とシャワーを止めて、ハンガーにかけてある制服に着替える。紺のブレザーにチェックのズボン。実は結構お気に入りだ。

着替えてすぐに焼いておいたトーストをかじり登校の準備をする。

ここから学校までは結構距離があるので早めに家を出なければならぬ。ちょうど今ぐらいの時間帯に出ればちょうど良い時間にく。

靴を履いて家に鍵をかけて学校に向け歩き出す。

ふとポケットの携帯を見る。表示されている時間はいつもと同じ決まった時間。

——考える。

毎日が同じことの繰り返し。逸脱した出来事なんてない。それがいいんだ。

……そうじゃない。

…何を言ってるんだ？

それでいいんだ、だろう。

そこで思考をストップし、ゆっくりと学園へ向かう。足取りはいつもより重い。

……いや、そんなことはないか。足取りが重いのはいつものことだから……。

秋の始まり。 (後書き)

次話から既に不定期連載になると思います。へたれ作者ですいません。

郷愁の詩（前書き）

こんにちは。第2話です。

やっとここまで来れたかな、という感じです。

ん？ ああ、はい。そうです。とんだヘタレ野郎ですね。よく言われます。

郷愁の詩

マフラーをはずして教室に入る。

教室は毎度来るたびに騒がしい。当然だ。そういう時間帯に着くように家を出たんだから。

学校は好きだ。クラスメイトがいる。友達がいる。親友がいる。だから俺はいつもHRが始まる5分前に学校に着く。5分前それが一番騒がしい時間帯だから。

教室の奥の窓側の自分の席まで行き、椅子に座る。

「あ、おはよう。アキ君」

近くから挨拶の声がかかる。隣の席の北見さんだ。

「あ、うん。おはよう」

人と話すのはあまり得意じゃない。ましてや女子なんてもってのほかだ。

だから毎回でもってしまふ。恥ずかしい。

騒がしいHRも終え、授業の準備をする。

教科書を持って席を立つと肩が朝よりも軽く感じる。息苦しさもない。

——やっぱり学校は好きだ。

「……………」

教室の窓から暖かな日差しが注ぐ。早朝の冷え込んだ空気が嘘だったかのようで、その温かさに思わず欠伸が1つこぼれてしまう。雲1つない快晴に、中庭に落ちている桜の花びら。5月という中途半端な時期でも、まだまだ春を思わせてくれる。気持ち良い。

時は最後の6間目。朝の沈んだ気持ちも今ではすっかり消えていて、時間が流れるのはつくづく早いと思う。

「はい、終わり。後ろからテストを集めてください」

若い新任の女教師がテストの終わりを告げる。テストの問題があまり解けず放心していると前の席から声がかかる

「なにぼっとしてんだよ。ほら、前にテストを回してくれ」

考え事をしていた俺に白を切らした様で前の生徒が手を伸ばしながら言う。

「あ、ごめん。」

焦りながらも静かにテスト用紙を渡す。前の生徒は怪訝な顔をしていたが既ににどうでも良くなったらしい。何事もなかったように前を向く。

俺の学校での立ち位置はこんな感じ。友達はいるといっても誇れるほどいない。話すのはキライではないが話す相手がいない。周りからの評価はそこに存在はしているが、気にならない。どうでもいい。そんな感じだろう。

「……………ははは」

自分で言って悲しくなる。

耳を澄ませば周りの席から声がする。テストがどうだったかの話をしているのが大半。俺はそれに混じることなく窓の外の景色を見る。地味な俺に話しかけて来る友達はクラスに一人くらいしかない。けどその一人も前回の席替えでだいぶ離れてしまった。

「アキくん。テストどーだった？」

隣の席から声がかかる。

俺にはもう一人いてくれたらしい。隣の席になったからって俺なんかを気にかけてくれる優しい女の子。北見さん。俺からすれば大切なクラスメイト。自然に頬が緩む。

「結構良かったんじゃないかな」

無視なんてしない。俺には出来ない。

「へー、すごいなー。私は全然ダメだったみたい」

そう言って拗ねたように机に突っ伏す北見さん。どうやら北見さんは勉強はあまり得意じゃないらしい。

俺は苦笑しながら北見さんの勉強に対する愚痴を聞いていた――
…。

「はい、じゃあ連絡事項もないし、各自解散していいわよー。」

少しの間北見さんと駄弁っていたら、担任の掛け声が響く。ようやくHRが終わったようだ。

「あ、やっと終わった。それじゃあまた明日だね。じゃあねーアキ君」

HRが終わり北見さんも他の生徒もそろそろと教室を出て行く。この学校はスポーツ推薦があるので部活動は盛んなほうだ。今出て行ったクラスメイトたちも大抵は部活動だろう。ちなみに北見さんもだ。

俺もそろそろ帰ろうかなと思った時、タイミング良く後ろから聞きたれた声がかかる。

「アキ。もう帰るの？」

「……愁」

眠たそうなに目をこすらせながら近づいてくる男。鷹野愁。たかのしゆう 物心ついたところからの幼馴染。サラサラの栗色の髪の毛。整った鼻筋、顔のパーツはどこも整っていてルックスは完璧。頭脳明晰。それに加えて運動神経抜群の男。それでいて俺のたった一人の友達。俺もその友達に微笑みながら話しかける。

「そうだね。もう学校に用事はないから」

別に部活にも入ってないし。

「帰り……一人だろ？俺も一緒に帰りたかったんだけど……」

悲しそうに下を向く愁。

「そんなの別に気にしなくてもいいのに。部活忙しいんでしょ？」

「まあ、そうなんだけど……。」

愁はこの高校の剣道部に籍を入れている。毎日が忙しいらしいから一緒に帰れる日は少ない。それが愁にとっては苦痛らしい。

「お前が剣道部に入ってくれればいいんだけどな」

愁が呟く。もう何度も聞き慣れた言葉。当然答えももう決まっている。

「それは……無理だよ」

正直部活自体は楽しそう、だと思う。俺は今の剣道部のメンバーなんて愁以外知らないけど、愁がただで楽しいと思えると思う。

否、楽しいだろう。

それでも俺は剣道部に入ることはないと思う。

「……けど！悠南ちゃんだっているん——」

「愁っ！」

自分でも信じられないくらい大きな声で愁の声を遮る。突然の叫びで愁も残っているクラスの皆も驚いているが、今はそんなことはどうでもいい。唯、その先の言葉は聞きたくない。

「……悪い。やっぱまだダメだよな。」

バツが悪そうな顔で言う愁。

違うんだ。やめてくれ。

俺は愁に怒ったわけじゃないんだ。そんな顔しないで、愁は別に悪くないんだから。悪いのは全部俺。

部活に入れないのも愁をそんな顔にさせているのも全部俺なんだから……。

考え込んで黙っている俺が怒っていると思ったらしい。目の前の愁が珍しく慌てている。

俺はすぐさま否定した。

「大丈夫だよ。愁は全然悪くないから……。」

そう俺が言うと、さっきまで慌てていた愁はほっと一息ついてにっこり笑う。やっぱり愁はその顔が一番似合うと思う。

鷹野 愁。俺なんかと話してくれる人。俺の大切な友達。どんなに少しの時間でも一緒にいてくれるだけで幸せになれる。決してホモじゃない。

その後、少しの間他愛のない話をして時間を過し、もう生徒会の集合時間5分前。愁も行く準備をし、そろそろ俺も帰ることになった。

「それじゃあ気をつけて帰れよ」

「分かってるよ」

「あ、忘れてた。明日アキン家集合だかな。ちゃんと家にいるんだぞ」

ニヤハハと笑いながら俺に別れと一方的な約束を告げる愁。少しの沈黙の後、俺も静かに頷き、愁は小さく手を振って教室を出る。

愁が教室を出る際に一瞬見えた顔は苦しそうで何より悲しそうな表情だった――。

郷愁の詩（後書き）

誤字脱字あったらご報告お願いします。

それから感想アドバイス等もいつでも承っているのでどんどんお願いします。

邂逅（前書き）

随分ほったらかしてしまいました。すいません。

今回は少し明るい主人公が出てきます

邂逅

突然だがこの学園は敷地がやたら広い。

鉄筋の校舎はもちろん、グラウンドや敷地の広さ、食堂までもが満面に充実している。屋上に行けばカフェテリアやテラスなんかもある程だ。

さて、こんな高校だったら何が多いかって言うと、それはもちろん生徒の数だ。

この咲間学園は1学年500人以上。3学年合わせて1700人弱はいる超マンモス高だ。

だからなのだろう。こんな事が起きたのは――……。

「本当にすみませんっ」

「いやいや、別にいいって」

放課後。愁と別れた後、帰る為に廊下を歩いていた俺だが、階段を降りた直後、上から突然降って来た謎の少女に潰され、昔から体が弱かったこともあってか意識を失ってしまったらしい。

気付いたらそこは保健室のベッド。

またもや突然だが、近々結構な数の部活の大会があるらしく、そ

れに該当する部活の選手などは皆、H R終わった時点で寄り道などせず、すぐさま部活に直行している。ここは文武両道で名の知られた私立校なので、当然スポーツ推薦から、特別進学コースなど様々な種類のコースがある。勉強は勿論のこと、スポーツのほうの活躍も目覚しく、皆インタハイを目指して奮起している。そのインタハイへの第一歩がこの大会だ。焦る気持ちも仕方がないと思う。

帰宅部には一生分からない気持ちなのだが……。

閑話休題。

何故こんな話しをしたのかには勿論理由がある。まあ、率直に簡潔に言うと、彼女が部活動頑張り組みに階段で接触した後、バランスを崩した彼女が俺と接触したと言う訳だ。

「本当にごめんなさいっ」

だから決して彼女が悪いわけではないのに何度も謝ってくる少女。悪いのはキミじゃなくてどこかで汗水垂らしている部活動バカなんだよ。と思わなくもないが決して口には出さない。もし誰かに聞かれてたら大変だし、そもそも目の前の彼女もそれに該当する人物かもしれないし。

「いやいや、本当に大丈夫だからさ。」

手をひらひらさせて、大丈夫だということを認識させる。

「……でも」

いまだ不安なのか何か言いたげで不安そうな顔をする少女。多分俺がずっと寝ていたから驚いたのだろう。

本当に大丈夫なのに。

なので、出来る限り表情を明るくさせて笑顔で言う。

「あ、あのさ。俺って体弱いから時々こういうことがあるんだよ。だから、別に気にしないでいいって言うか……。うん。気にしないで」

最初のほうで少しもってしまったのは女の子とあんまり話さない俺としては仕方ないことだとして、寧ろうまく出来たんじゃないかって感じた。

彼女も俺が大丈夫だってことが伝わったのか、ぎこちないが、笑みが戻っている。上出来だ。

それから彼女が部活に行くまで保健室で少し話をした。周りの事や部活動のことなど。見た感じ後輩かな、と思っていたが予想通り一つ下の今年入ったばかりの一年生らしい。しかも、驚いたことに彼女はバスケットらしく、うちの毎年インターハイ常連高の強豪女子バスケ部で、スタメンだと照れくさそうに告げていた。見た目細いのに凄いなと感心したと共に、さっき部活動バカのことを言わなくて改めてよかったと実感した。

実際彼女が部活に行くまで話したのは10分か15分程度だが、30分くらい話してたんじゃないかと思えるくらい長く思えた。

最近愁意外とあまり話す機会がなかったから、とても充実した時間だったと思う。

また話したいなと思うと同時に気付いた。

「名前聞くの忘れてた……」

なんということか、自分の名前は告げといて彼女の名前を聞くのを忘れていた。

「まあいいか」

まあ、こんな広い学校でもどこかでいつかすれ違うだろ。その時に聞けばいいか。

そう自己完結して保健室を出る。

途中何度も部活動に熱心に打ち込んでる生徒を見るが、見た目に思ふ。

（バカなのは運動も青春もしてない俺のほうか）

けどそれで良い。俺はそういう人間だ。

そうして昇降口で靴に履き替えゆつくりと帰路を歩く。いつもの疎らにいる帰宅部の生徒もこの時間となった今では1人もいない。

いつもの重い足取りも、今日は自然と軽い気がした――。

邂逅（後書き）

いや、ほんと申し訳ないです。

この作品を見てる人なんてあまりいないと思いますが、お詫び申し上げます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0090k/>

End of autumn

2010年10月19日06時47分発行